

違いを超えた世界へ

河口湖南中学校組合立河口湖南中学校三年 尾畠 百香

「人を見た目で差別するな。」

これは、私が幼い頃から現在までずっと、母から言われ続けてきた言葉です。私が幼い頃体験した、「人権侵害」についての出来事とこの母の言葉が、今の私を創り上げています。

私が母と二人でスーパーマーケットで買い物をしていた時のことです。店内を歩いていると、周りとは少し容姿の異なる男性が目に入りました。そのとき生まれて初めて、自分とは肌の色が違う方と出会いました。当時の私はまだ幼く、思ったことがすぐ口をついて出しました。その言葉が「差別用語」であり、「人権侵害」につながるとはまったく分からずに、疑問を口に出してしまいました。

「お母さん、なんで黒い人がいるの？」

その瞬間、母親の目つきが一瞬にして変わりました。その母の目と、その後の言葉は今でも鮮明に覚えています。

「世界にはいろいろな人がいるの。肌の色で、人を判断してはいけない。さっき、あなたが言った言葉は、差別用語になるからこれからは絶対に言うてはいけないよ。」

母の厳しい目と言葉は、私がしてはいけないことをした、ということを物語っていました。当時の私は、母の言葉を完全には理解できていなかったと思います。母の言葉を完全に理解し、自分の犯してしまった罪を自覚したのは、中学校に入学してからでした。

社会科の授業でのことです。世界のことにについて学んでいた際に、私は心に刺さる言葉を耳にしたのです。「アパルトヘイト」「白豪主義」これらは、かつて南アフリカやオーストラリアで行われていた、ヨーロッパ系以外の人々に対する人種差別や移民の制限などの制度のことです。肌の色が異なるだけで、住む場所や使用する施設を区別したり、移住を制限したりするなどの、厳しい差別がありました。この話を聞いた時、私の脳裏にはあの記憶が蘇ってきました。

「黒い人がいる。黒い人。黒い人・・・。」

何気なく言ってしまったあの言葉が、差別用語だと、気がつきました。同時に、母の表情の訳や、言葉についても理解しました。私は、あの二つの制度のよう

に、人を隔離した訳でも差別した訳でもありません。しかしながら、「黒い人」つまり、人を肌の色で区別してしまいました。これは立派な「人権侵害」であると自覚しました。

人権とは、世界中の人すべてが幸せに生きるための権利のことであり、人種や民族、性別に関係なく、万人に共通して備えられる権利のことです。これを侵害することは「人権侵害」なのです。自身の体験と、授業での学びから、人の見方や考え方が大きく変わりました。世界には様々な人がいること、それを理解しながら生きていかなければならないことなど、いくつもの大切なことを学ぶ機会になりました。

しかし、実際はこの世の中は「人権侵害」で溢れていると思います。例えば、今なお世界で起こっている戦争です。罪のない命が兵力によって奪われています。それだけに留まらず、生き延びた人々の心にも、一生残るような傷跡を残します。戦争は、大勢の人の権利を一瞬にして奪ってしまう、最低最悪な人権侵害の一つです。戦争を無くすためには、何をしたら良いのでしょうか。それは、一人一人が真剣に悩み、考えることだと思います。平和な日本で「戦争」と聞くと、どこか他人事のように感じられます。確かに、自分一人ではどうすることもできない大きな課題です。しかし、何か行動を起こすことはできるのではないのでしょうか。

私が真剣に悩み、考える過程で、幼い頃にしたあの体験が、私にヒントを与えてくれました。世界には様々な人がいます。民族、国、人種、風土、地域、性別、障害の有無など、誰一人私と同じ人はいません。だからこそ、異なる意見をぶつかり合わせて対立するのではなく、お互いに認め合い、受け入れながら高め合うことが必要だと考えました。少しずつではあるかもしれませんが、一步一步確実に、「平和」で「争いのない」世界に近づいていくと思います。そしてこの考え方がより多くの人に、社会に浸透していけば、「人権尊重」につながり、誰もが平等に暮らせるようになるのではないのでしょうか。私が実際に体験して学んだことを、まずは身近な人に伝えていき、それがだんだんと多くの人に広がっていくといいなと思います。様々な違いを超えて、世界中の人と共に歩んでいける世界になることを、私は願います。